

◎サンゴと地球環境

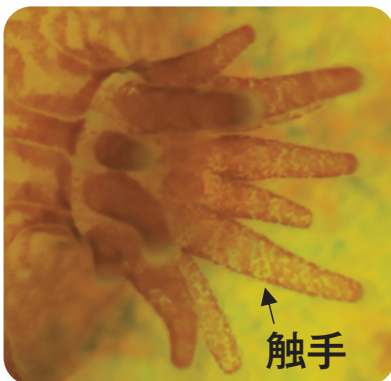
～生物多様性を支える基盤～

近年、気候変動や環境保全の話題とともに「サンゴ」という言葉を良く目にするようになりました。例えば、「サンゴが大規模に白化」「サンゴの○%が死滅」「サンゴ移植」などの言葉を見聞きした覚えはありませんか？

ここでは、サンゴについて「サンゴとは何か?」「サンゴの環境での役割とは何か?」「サンゴはどういった問題に直面しているのか?」「サンゴは静岡県でもみられるのか?」などについて紹介していきます。また、最後に「サンゴを守るために何ができるのか?」についても少しふれたいと思います。

サンゴとは何か？

サンゴとは、クラゲやイソギンチャクなどに近い刺胞(しほう)という毒針をもつ動物です。他の動物同様に、餌を食べ、卵を産みます。



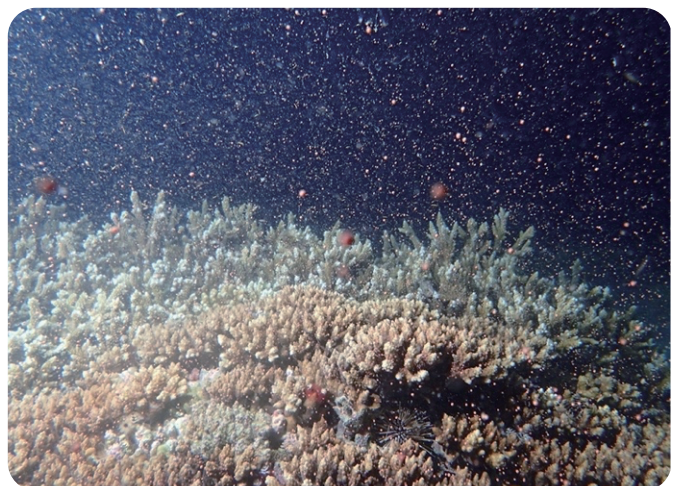
ポリプの写真(触手内に茶色く見えるのが褐虫藻)

サンゴの中で、沖縄などの熱帯・亜熱帯域にみられるサンゴ礁という地形を形作っているサンゴを「造礁サンゴ」と呼びます。造礁サンゴは、炭酸カルシウムの骨格をもち、死ぬと、硬い骨格だけが残ります。そういった死んだサンゴの骨格、貝殻、ウニの外骨格などが数千年という長い年月をかけて積み重なってできる地形がサンゴ礁です。つまり、『サンゴは動物、サンゴ礁は地形』を意味しています。

造礁サンゴは、褐虫藻(かっちゅうそう)という藻類を体内に共生させています。褐虫藻はサンゴの体内で光合成を行います。造礁サンゴは、褐虫藻が光合成で作出した有機物をエネルギーの一部としています。このような造礁サンゴの中には、サンゴ礁が形成されないような温帯域などに生息するものもいます。このため、近年、サンゴの呼び方として、造礁サンゴだけでなく、「有藻性イシサンゴ類」という呼び方を使うことも多くなっています。造礁サンゴの多くは有藻性イシサンゴ類に属しますが、造礁サンゴにはイシサンゴ以外の分類群も含まれます。

サンゴ礁の海から温帯の海まで広くみられるサンゴの多くは、イソギンチャクのような形をしたポリプがたくさん集まって個を作る群体性の動物です。また、サンゴの多くは、サンゴ礁や岩礁などの硬い海底基盤に固着しているため、生息環境が大きく変わっても、逃げるできません。

これらのサンゴは年に1回～数回、卵や幼生を産みます。サンゴの繁殖様式は大別すると「放卵放精(ほうらんほうせい)型」と「幼生保育(ようせいほいく)型」に分けられます。放卵放精型のサンゴの多くでは、年に1度、卵と精子を海中に放出し、受精が海中で起こります。皆さんが海の中で、もしくは映像などで「サンゴの一斉産卵」としてみているものは、放卵放精型のサンゴの産卵シーンです。放卵放精型のサンゴの卵と精子の放出方法は、卵と精子をバンドルと呼ばれる1つの塊にして放出する方法と、卵と精子を別々に放出する方法、卵



放卵放精型のサンゴの産卵シーン@高知